



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	美深町の転作対応における肉牛経営への転換と定着への課題
Author(s)	斎藤, 仁蔵
Description	卒業論文紹介
Citation	農業経営研究, 12, 167-173
Issue Date	1986-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36426
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_167-173.pdf



美深町の転作対応における 肉牛経営への転換と定着への課題

斎 藤 仁 蔵

1. 課題と対象の周辺
2. 農家の対応と展開
 - (1) 経営の全体的うごき
 - (2) 土地利用について
 - (3) 型態変化におけるグルーピング
3. 現在の問題と今後の展望

1. 課題と対象の周辺

昭昭59年版、北海道農業基本調査結果報告書によると、稲作の北限地帯である美深町の耕地面積は4442.68 haで、うち稲をつくった田が315.2 haである。転作以前は稲をつくった田が1000 ha以上あったことを考えれば、稲作から他作物への転換を強く迫られてきたといえる。畑作物の収量も北海道平均に一步及ばないし、畑作でペイする規模もない農家が大半を占めている。そこで彼らは町内の酪農家から出るホル牡犢に着目し、育成・肥育することで転作飼料畑の活用と同時に転作への経営的対応をとることとした。今回の課題は、この対応を定着しつつある転作事例の1つとして位置づけ、現在までの展開を明らかにし、今後の方針を考えてみたい。なお、対象として10戸の農家を調査した。

町内には農協経営の哺育センター（S48設立、S54増設）があり、肥育用素牛の安定供給に努めているほか、ホクレン系統による飼料の販売、肉牛の買付け、資金援助があるなど系統組織の基盤は整備されてきている。一方では飼料販売、肉牛買付けなどにも商社などが介入し、肉牛に関する流通は複雑な状況下にある。また美深は林業が盛んであることからパーク事業によって副産物の樹皮の加工場を設置し、肉牛用の敷料として町内に供給する体制もできている。

2. 農家の対応と展開

(1) 経営の全体的うごき

ここでは、水稻面積、畑作面積（転作畑を含む）、肉牛頭数、兼業の有無という4つの要素を中心に考えてみる。典型的展開の様子を4つの農家②⑥⑨⑩で挙げている（図1参照）。

(i) 4つの要素は密接な関係をもって展開するが耕地面積と作付に制約される。農家の安定的所得を支えていた稲作が転作によって根定から崩れるわけであり、それらを補う要素は転作が開始してからの耕地面積に大きく左右される。

(ii) 稲＋畑＋牛＋兼業というパターンがない。労働力の面にも制約されるだろうが、展開の方向にある程度の選択が残されていたと考えられる。

(iii) 全転して10ha＋肉牛という型態がとれると②のように兼業に出ていかないが、それ以外は兼業に出ている。しかし、兼業をやめるきっかけとなったのはいずれも肉牛頭数の拡大である。つまり畑作農家として存立するには広大な耕地が必要であることを明示している（畑作の中堅地帯である十勝、網走地方では平均が10ha以上）。

(2) 土地利用について

土地条件としては石礫と粘土が目につくが、これは以前水田であったからで、排水、暗渠をすることで対応しているものの、畑作用耕地としては悪条件だ。農家の声では畑作に適した水田は早期から転作畑にしたそう。稲の収量をみても収量の悪い土地が畑にされ、良い土地が残るわけではない。⑩の1.5haの水田のように表土が浅く畑作不適の土地が残ったともいえる。他の2.6haの土地は良好な土地で早くから転作畑となっている。

草地利用という視点からいえることは、1回しか刈れない農家の土地条件として粘土質であることが目につく。特に⑦⑧は土地が狭い上に多頭化しており、機械利用、粗飼料確保の点からも草地利用改善が必要かもしれない。また、①③にはデントコーンがはいっており、畑の連作障害防止、粗飼料確保、肉牛の健康管理という面から畑作の中に導入されてきているのはおもしろい。

(3) 型態変化におけるグルーピング

(i) 耕地拡大・畑作肉牛複合型

②と比較的同様の展開をなしたものに①③④がある。耕地を借入、購入し、耕地の

拡大をはかり、安定した草地基盤のなかに肉牛が導入されており、S50年以前には肉牛が導入されるなど、比較的進んだ取り組みである。①②は畑作をいかして進んだ複合経営で、収量が良いのは堆肥による土づくりが進んでいるものといえる。③④は広大な草地を背景に畑作省力化傾向で多頭化に進んでいる。肥育の場合は、動物資産という点では1年に1回しか資金が回転しないのに、金利が高く利益の半分は金利にもっていかれるとのことだが、①②は畑作という基盤の中に、④は多頭化によりその金利負担に耐える能力がありそうだ。

(ii)肉牛専門施設型

⑤⑥⑦⑧は全面的に牧草を作付し、小面積で牛の多頭化をなしている。いずれも育成である。転作の開始された時点で兼業に依存し、耕地の拡大ができなかった点が(i)との岐路であったといえる。

(iii)畑作肉牛複合型

⑨は他と比べ肉牛も畑作もともに中規模であって、(i)と(ii)の中間的存在として今後の展開が注目されるタイプである。その意味も含んで、S55から5.0haの借地をしていることが、(i)から一歩抜け出た展開に導いている。

(iv)稲作残存複合型

10戸の中で⑩は現在もなお稲作が残存している唯一の農家で、他と比べ畑作も肉牛も小規模であるが、1.8haの稲作が経営を大きく支えていると考えられる。

最後に、展開の節目に大きな力を与えていると考えられる要因をまとめてみた。多少重複する点もあるが、展開の方向と経営の型態を左右するものとして理論づきたい。

- 1) 堆肥による土づくりの考え
- 2) 米にかわって収益をあげるもの
- 3) 土地面積と土地利用
- 4) 地理的条件（天候・土質など）

3. 現在の問題と今後の展望

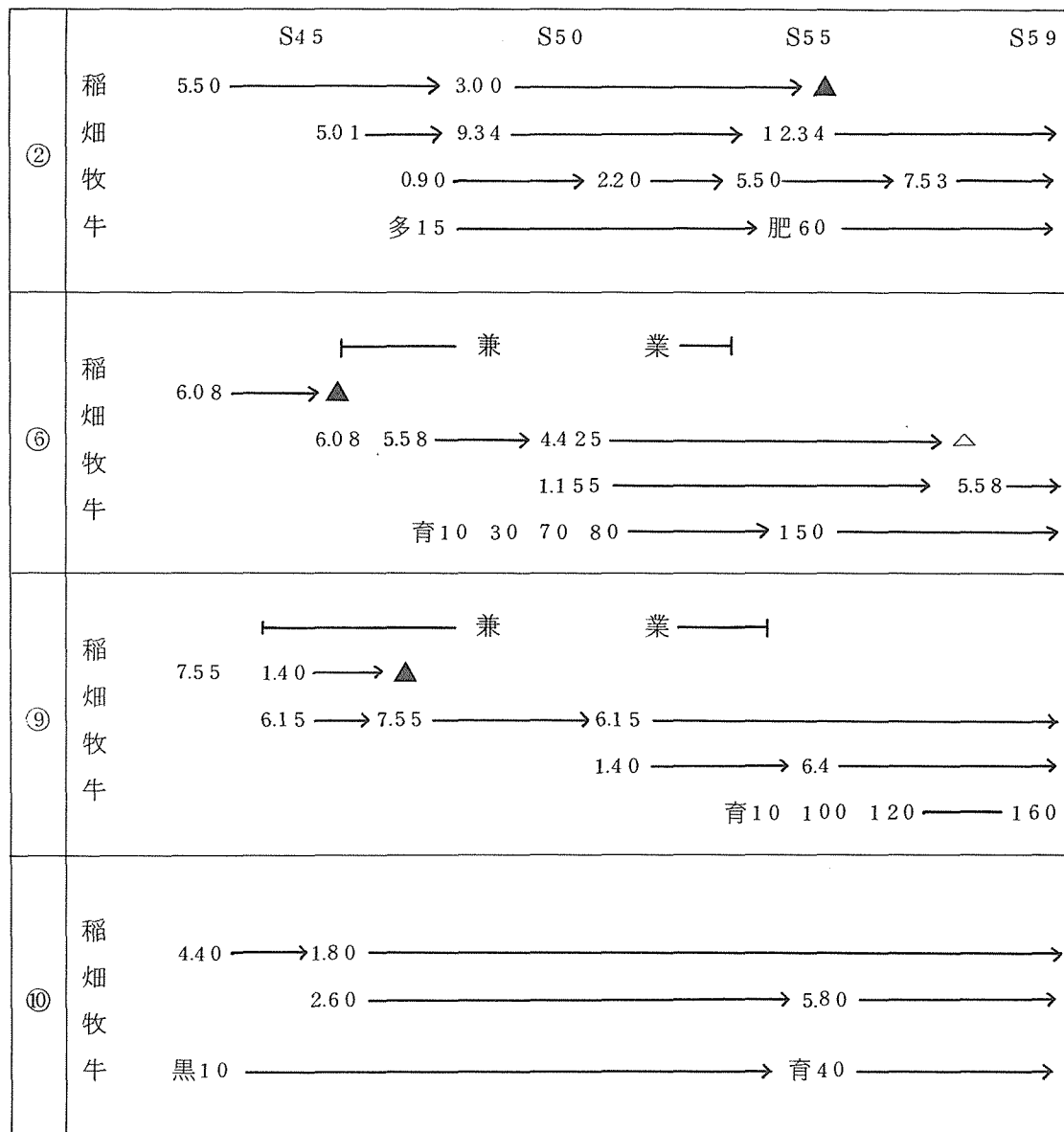
このような多様な展開は肉牛の管理など、技術的側面をも規制するようだ。例えば、(ii)(iv)は草地が牛頭数に比べて小さい（ない）ので、濃厚飼料多給型の飼育になっている。逆に①②③などは牧草の他にデントコーン、ビートパルプなど、他の農家より進んだ考えをもって飼料給与を行っている。個々の農家は各自さまざまにそ

の型態にあった給餌体系を考えているが、それは視点を変えれば、標準的な個体管理技術の確立・普及が遅れているともいえる。

流通に関しても肉牛の導入先、販売先がさまざまであるが、転作定着の成功の事例の多くは地域ぐるみの生産と出荷で対応していることからすれば、美深町の肉牛生産は流通が不安定な状態にあるといえよう。流通量の確保と価格の安定化が経営安定につながると考えられる。

大半の農家は経営規模も拡大し、そろそろ安定維持の段階にはいったと考えられるが、肉牛生産組合集団（国から助成を受けている）などの機能を利用し、技術の標準化によって生産を向上し、安定生産を図る時機が到来したといえないか。また、肉牛から出る堆肥の利用、転作飼料畑の活用を含めて集落の連帯を強めることが考えられるなど、残された課題は多い。

図－1 転作開始から S 59までの農家の展開の様子



単位：ha、頭

※。畑は転作畑も含む

○ 牛の頭数は常時確保頭数

○ 育……ホル育成 肥……ホル肥育 黒……黒毛和種

多……多種の牛（短角、ホル雄、メス育成など）

○ ▲……稲作がなくなった年 △……畑作がなくなった年

表－１ 調査農家の概要（Ｓ５９）

		①	②	③	④
経営耕地面積 (S44)		26.90 (16.60)	19.87 (5.50)	36.40 (16.40)	20.80 (7.60)
うち借地 (ha)		8.55	2.93	15.00	13.20
作付	水稲				
	畑作物	21.80(1)	12.34	10.60(2)	3.30※
牧草 (ha)		5.10	7.53	28.50	17.00(4)
土地条件		石多い	本地 5.5 ha のみ粘土	石多い	石多い (畑一良)
土地改良		S56 暗きよ 深耕、排石	S45、排石 暗きよ	S45 暗きよ S55 排石	
平 年 反 収	水稲	7 俵	7 俵	6.5 俵	6 俵
	大豆	4 俵	3 俵	2 俵	
	小豆		3.5 俵	2 俵	2.5 俵
	ビート	5.5 t	5.5 俵		5.5 t
	小麦 { 春 秋 }	6.5 俵	4.5 俵	5.5 俵	
牧	その他	かぼちや 1.8 t		デントコーン 6 t	
	草	3300 Kg	2400 Kg	1800 Kg	3000 Kg
	(刈り取り回数)	2	1	2	1(たまに2)
肉牛	常時確保頭数	肥 100 頭	肥 60 頭	育 400 頭	肥 180 頭
	出荷頭数	85 頭	58 頭	700 頭	144 頭
	導入先	哺育センター	ホクレン、生産連	家畜商	哺育センター
飼料確保	濃厚飼料等	350 t	136 t	360 t	640 t
	乾草 { 自家生産 購入 }	23 t	26 t	80 t(3)	100 t 16 t
	デントコーン	8 t		250 t	
飼料確保	ビートパルプ等		29 t		
	濃厚飼料等				

(1)うちデントコーン少々

(2)うちデントコーン 3.0ha

(3)他に売却40 t

(4)他に町営牧場の草地利用

⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
9.00 (9.00) 2.00	5.58 (6.08) 0.60	5.36 (4.66) 0.70	6.00 (4.10) 1.90	12.55 (7.55) 6.40	7.60 (4.40) 3.20
3.00 6.00 } (5)	5.58	4.96 ※	5.80 ※	6.15 6.40	1.80 5.80
粘土 S 53 暗きよ S 58 暗きよ	砂っほい 石多い S 57 暗きよ	排水悪 粘土、石 S 48 暗きよ 石灰深耕	粘土 S 58 暗きよ	良	稲→表土が浅い 暗きよを少し ずつ
6.5 俵 3 俵 5 t 3.5 俵 5 俵 3000 Kg 1	6.5 俵 5 俵 3 俵 5 t 2 俵 6500 Kg 3	6.5 俵 3 俵 2.5 俵 5.5 俵 3000 Kg 1	6.5 俵 3000 Kg 1	6 俵 3.5 俵 3 俵 4.8 t 2 俵 6 俵 3000 Kg 1	6 俵(6) 3.5 俵 5 t 2.5 俵 5.5 俵 3000 Kg 1
育 300 頭 378 頭 家畜商 ホクレン	育 150 頭 230 頭 市場、農家 ホクレン、畜連	育 250 頭 392 頭 農協 ホクレン	育 270 頭 430 頭 家畜商 ホクレン	育 160 頭 210 頭 家畜商 ホクレン、商社	育 40 頭 68 頭 農協 ホクレン
48 t (1.0 t/頭)	29 t 6 t 192 t	38 t 350 t	50 t (0.9 t/頭)	30 t 210 t	(稲わら少々) 4.5 t 46 t

(5) S60全面牧草

(6)転作開始当時の実績(現在8.5俵)

※不足分は施設用地